

『イーゴリ軍記』の文体

——「古き言葉」の意味について——

中村喜和

『イーゴリ軍記』Слово о полку Игоревеの作者は、中世にはめずらしいほどの鋭敏な文体意識の持ち主であったようである。彼はまず作品の冒頭において、何が自分のテーマであるか宣言するにとどまらず、いかに物語をすすめるべきかを問題にしている。その名も伝わらぬこの十二世紀末のロシア詩人にとっては、創作の目的が方法の明確な自覚と密接に結びついていたのである。

しかし、作品理解のかなめともいふべきこの劈頭第一節をいかに読みとるべきかについて、諸家の説は今なお一致をみていない。以下のノートは、この一節に与えられたさまざまな解釈を批判的に紹介しようとするものである。

念のために、一八〇〇年の初版テキストをそのまま掲げてみよう。

Не дѣлои ны башеть, брате, начати старыми сло-
веси трудныхъ повѣстий о полку Игоревѣ, Игоря
Святъславаича! начати же съ тѣхъ пѣсни по быди-
намъ сего времени, а не по замышленю Бояню.
(*Editio Princeps*, стр. 1—2)

幸いなことに、この部分には初版刊行者たちが「不明箇所」
тѣмное мѣстоと名づけた解説不能の字句は含まれていない。
テキストの読み方そのものにも、ほとんど疑問が提出されてい
ない。

『イーゴリ軍記』の日本語はすでに五種類あらわれている
が、最初の翻訳者である米川正夫氏によるこの部分の訳は次の
とおりである。

同胞よ、今や我等はイーゴリ公の
イーゴリ・スギヤトスラギチの
悲愴なる戦語を始むるに
古き言葉を用ひることこそ
相応はしくないであらうか!
この歌は今の世の真語りを
基として始めるべきであつて
バヤンの架空談に似せてはならぬ。

ここにあらわれるイーゴリが作品の主人公であり、バヤン

(あるいはボヤーン)は十一、十二世紀に実在したと一般に推定される詩人である。

右のテキストをそのまま読むかぎりでは、作者は、まず *Старыми словесы* 「古き言葉をめて」物語をはじめるときでは「ないだらうかと述べ、」*не по замыслу Боиню* 「ボヤーンの趣向によらず」、*по былиннь сего времени* 「今の世のまことのまに」うたいはじめなければならない」として、いるものと受けとれる。

このような意味のとり方にはやくも疑問を表明したのは詩人プーシキンであった。プーシキンは生前未発表のノートのみならず、「古き言葉をもつて」語ると述べながら「ボヤーンの趣向」によらぬというのは矛盾であるとして、第一の文を疑問文ではなくて単なる否定平叙文とする解釈を示している。⁽²⁾ すなわち、「古き言葉をもつてはじめるのはふさわしくない」というのがこの文の意味となる。プーシキンは、古代スラヴ語においては小詞 *ѣ* はかならずしも疑問の意味をもつものではなく、とくに歌謡では、文の調子をととのえることだけを目的として用いられうる、と考えるのである。プーシキンの説は今にいたるまで支持者を見出してはいない。しかし、詩人の直観が提起した問題は依然として氷解してはいないのである。

(1) 『ロシア文学研究』第二集、一九四七、新星社、一四四～一四五頁。

(2) Пушкин, А. С. *Полное собрание сочинений*, т. IX, 1937, Academia, стр. 291—292.

(3) 今もってあとをたない懷疑論者が、『イーゴリ軍記』偽作説の論拠の一つとして「古き言葉」をあげているのはこのためである。Зинин, А. А. *Когда было написано «Слово»? Вопросы текстологии*, 1967, No. 3, стр. 143.

二

原文で「古き言葉をもつて」につづく *трудныхъ повѣстий* 「傷ましき物語」が文法上風格に置かれてゐることを目して、フランスのマゾン A. Mazon が「見せかけのアルカイズム」と断じたことはよく知られている。『イーゴリ軍記』偽作説を奉ずるマゾンの目には、начити「始める」の直接補語が対格ではなくて風格に立つのも、十八世紀の贗造者たちの小細工と映じたのである。

これに対しては、この場合の風格が不自然な「いにしえ調」ではなく、начити という不定法のまゝに не をふくむ否定構文の結果生じた、いわゆる否定風格にはかならずと指摘するヤコブソン R. Jakobson の反駁がある。⁽¹⁾ またソヴェイトのオプノールスキイ С. П. Оболенский やオルロフ А. С. Орлов などは、『イーゴリ軍記』中にいくつかの類似の表現があることを理由として、*трудныхъ повѣстий* を「いわゆる部分風格と考えてい⁽²⁾た。いずれの説をとるにしても、この風格はマゾン流の偽作説の有力な論拠たりえないことになる。

この *трудныхъ повѣстий* を否定風格とも部分風格ともみとめず、「古き言葉」を限定するものととる見方も、十九世紀

のシールレル B. Ф. Миллер 以来、幾人もの有力な研究家を
 けて最近のメモリーツキイ B. Г. Смолинский にいたるまで、
 連綿と主張されつづけてゐる。この立場からの解釈によれば、
 начати「はじめる」なる動詞はこの場合 прыг「歌う」を含む
 意味をもつ(あるいは прыгが伝来写本で脱落してゐる)と
 考へるべきであつて、作者は「傷ましき物語にふさわしい古き
 言葉をもつて」イーゴリの遠征を「歌いはじめ」ようとしてい
 るのだといふ。⁽³⁾しかし原典尊重を旨とする見地に立つならば、
 この解釈の弱点はおおいがたい。所与のテクスト(『イーゴリ
 軍記』の場合には一八〇〇年の初版本の底本として用いられた
 ものが唯一の伝来写本。これは一八一二年のモスクワ大火で焼
 失した)の範囲内で最も合理的な読み方を追求するのが古典解
 釈の普遍的な原則と考えられるからである。

もっとも、テクスト内部の形式的な整合をみださぬ「合理
 的」判断がつねにただ一つの読解を可能にするとはかぎらない
 こともみとめなければならぬ。

文法の立場から言えば、冒頭第一節の二番目の文の начати
 につづく жеをいわゆる逆接の接続詞として、но нет「とはい
 え、否」の意に理解しつつ、第一の文の反語的表現をもう一
 度全面的に否定してゐるものと説明することは、少しも不合理
 ではない。事実これがバルソフ E. B. Барсов 以来かなり広く
 受入れられてゐる解釈である。たとえばリハチョフ Д. С. Ли-
 хачев はこの部分を次のようにパラフレーズしてゐる。⁽⁴⁾

Не пристало ли нам, братья, начать старыми (ста-
 ринными) выражениями горестное повествование о по-
 ходе Игоревом, Игорь Святославича? — [Нет.] на-
 чать эту песнь надо, следуя за действительными со-
 бытиями нашего времени, а не по [старинному] за-
 мыслу (способу, плану, приему) Боина.

この読み方にしたがえば、作者は「……古き言葉もてはじめ
 るのがふさわしくないだろうか」と述べつつ、「いや、ふさわ
 しくない」としてそれを斥けてゐることになる。

だがここで、作者は作品のほかならぬ冒頭において、何ゆえ
 にこのような疑問を示さなければならぬのであろうかという疑
 問が生ずる。メモリーツキイの指摘を待つまでもなく、「古き
 言葉もてはじめるのがふさわしくないだろうか」とは、「それ
 こそ最もふさわしい」ということである。リハチョフにおける
 ように一たん反語法をもつて確認された命題が即座に打消され
 るととる修辭法上不自然な解釈が要求される理由は、「古き言
 葉」と「ボヤーンの趣向」の完全な同一視である。右の引用文
 中とくに括弧でくくられた補足 [Нет.] [старинному] が、そ
 のままりハチョフ的解釈の弱さを示してゐるやうである。

(1) Jakobson, R. *Selected Writings*, IV, The Hague-
 Paris, 1966, p. 216.

(2) Стелдский, В. И. *Слово о полку Игореве*, М., 1965,
 стр. 122. 著者は「現在のこの解釈だけが正当とみとめられ

「イゴリ」を注して云々。

(3) Смолинский, В. Г. Вспугливание в «Слове о полку Игореве»: *Труды отдела древнерусской литературы*, XII, М.-Л., 1956, стр. 14.

(4) Барсов, Е. В. «Слово о полку Игореве», как памятник Киевской дружинной Руси, т. III, М., 1889, стр. 254. (Смолинский, *op. cit.*, стр. 13).

(5) Лихачев, Д. С. *Слово о полку Игореве*, 2-е Изд., М.-Л., 1954, стр. 167.

(6) Смолинский, В. Г. *op. cit.*, стр. 13.

III

ボヤーンがいかなる詩人であったかを伝える直接的資料としては『イーゴリ軍記』以外にない。いま米川訳をもって、この作者におけるボヤーン像をさぐってみよう。

神の才とも云ふべきバヤンよ／人のため頌歌つくらんと思ふとき／卿の想ひは木々に擴がり／或は灰色なせる／狼のごと大地を走り／鴉羽色なす鷲かどばかり雲間を翔る……我とわが賢き指を／生きたる琴の絃に触るれば／絃はみづから／君主のため頌歌を唄ひしことを。(Ed. *Princeps*, стр. 2—4)

おお、バヤン／過ぎし世の露西亜の鷲！／想ひの木々を飛びちがひ／心のうちに雲間を翔り／野越え山越え／トロヤンの道を辿りて／今世のきみに頌きうだを編み／このたびの戦を歌はば／オレーグの孫イーゴリがため／卿はかく歌ひはじ

めん／「われらの鷹を／廣野のかなたへ追ひやりしは／吹きすさむ暴風にあらす／ガリチの勢はドンの大河へ遁れゆく」／エレースの孫、天才バヤン／卿は又かくも歌ったであらう！／「駒はスーラの彼方に嘶き／栄ある侯の名はキエフに響く／箠はノヴゴロドに鬨と鳴り／旗指物はプチヴリに翻る」(Ed. *Princeps*, стр. 6—7)

『イーゴリ軍記』の作者のボヤーン観はこの引用から容易に想像がつく。この場合、一部の研究者がと見えるように、ボヤーンが特定の人物でなく、普通名詞としてある種の吟遊詩人を意味していたとしても、差向えはない。ボヤーンは「神の才」をめぐまれた(Билин)大詩人であった。その詩的想像力はまさに不羈奔放であった。ボヤーンのこらしたる「趣向」とは、公の武勲をたたえる頌歌やその死をいたむ挽歌に示された彼の技巧の総体をさすものである。

『イーゴリ軍記』の作者はボヤーンの詩法を模倣し、それに追隨することを拒否する。これは、詩人の矜持であろうか。わが身にボヤーンの才なき自覚であろうか。あるいは才能の欠如をはのめかす謙讓の美德であろうか。そのいずれかであったにせよ、同時にこの作品の目的にとってボヤーンの技巧が不適当であるという作者の判断がはたらいたのではあるまいか。『イーゴリ軍記』は結局のところ、単なる頌歌でも挽歌でもないからである。

一方、「古き言葉」とは何であろうか。この場合の「言葉」Словаとは単に個々の単語の寄せあつめでないことは明らか

である。スレズネフスキイ И. И. Срезневский は「これを склад речи『言葉の調子』、способ выражения『表現の方法』と考えた。『言いまわし』、『文体』に近いものである。この説には異議があらわれていない。しかし「古き」старыйとは、『一世紀半をこえる『イーゴリ軍記』の研究史のなかで、『古き言葉』の意味に対しては、意外にわずかな注意しか払われなかつたように思われる。この作品が『古き言葉』で書かれていたか否かは、これを理解し鑑賞する上で決定的な重要性をもつ問題であることは言うまでもない。

ごく新しいところでは、現代ソヴェト学界の最長老マドリアノヴァ・ネーレツ B. П. Андранова-Перетц は「この個所を次のように注解する。(3) この作品では、старыйなる形容詞はヴラジミールやヤロスラフなど十一世紀のキーエフ大公に冠せられている。したがって「古き言葉」とは「十二世紀末の作者にとって一世紀も以前の言葉」と定義できる」と。これに対しては、人名を限定する старый は「作者と同時代の同名の公とのあいだに区別を立てる必要から使用されているのではないかと反論されうる。『古き』とは、*старый*と相対的な概念にすぎないのである。

「古き言葉」にもっと深い含意を見出そうとした早い例は十九世紀に求めることができる。前にもふれたミールレルがそれで、博大な知識をもって知られたこの中世文学史家は、『イーゴリ軍記』のなかにビザンツやブルガリアの文学からのつよい影響をみとめて、作者のいふ *старые слова* とはこれらの

文学の模倣の上に成立した軍記物語的文体を意味するのではないかという注目すべき見解を提出したのである。(4) しかしこの場合、なせビザンツやブルガリアの文体が「古い」のかとどう理由は充分明確にされなかつた。これとは逆に、チホヌラーヴ *Чихонравов* やポチニン *Починин* や А. А. Потёбня などはじめとする一部の研究者は、「古き言葉」によつて、ホヤーンをはじめとする吟遊詩人たちの武勲詩、あるいはひろく口承文学を理解した。(5) この解釈の長所は、「ホヤーン」の趣向「古き言葉」の特殊な場合、частный случай 《старых》 словесとして、『イーゴリ軍記』の開巻第一節を修辭的にも無理なく説明しようとする点である。

(1) Срезневский, И. И. *Материалы для словаря древнерусского языка* т. III, СПб., 1903, стр. 6. 417.

(2) 現代ロマンス語へのさまざまな翻訳を挙げてみれば、древним словом (初版本)『древним словом (В. А. Жуковский), старинною речью (А. Югов), словесами старинными (И. А. Новиков), старыми выражениями (Д. С. Лихачев), на старинный лад (Р. Jakobson, В. И. Стеглицкий)。

(3) Андранова-Перетц, В. П. Фразеология и лексика 《Слова о полку Игореве》《Слово о полку Игореве》и *псалтырники Кудряковского цикла*, М.-Л., 1966, стр. 26.

(4) Миллер, В. Ф. *Взгляд на «Слово о полку Игореве»*, М., 1877, стр. 180. (Смолинский, *op. cit.*, стр. 9).

(5) Головенченко, Ф. М. Слово о полку Игореве, Ис-
торико-литературный и фольклорный очерк, М.,
1955 年, 453-54 頁, Смолгинский, op. cit., стр. 8-11 頁。

(6) Поребня, А. А. Слово о полку Игореве, 2-е Изд.,
Харьков, 1914, стр. 8 (Смолгинский, op. cit., стр. 8).

四

『イーゴリ軍記』とビザンツ文学との関係は、最近にいたつて最も研究の成果がめざましい分野である。今や後者を無視して『イーゴリ軍記』を語ることは不可能になったといつても過言ではない。

小論の課題である冒頭の部分について言えば、十二世紀中頃にビザンツで書かれたマナセス Konstantinos Manasses の年代記との文体上のいちじるしい類似がオルロフによって指摘されている。ヤコブソンの紹介によれば、マナセスはトロイアの戦の歴史を語りはじめるにあたって、「この戦のまようは、その昔ホメーロスが書いたままではなく——なぜなら、彼は蜜のやうに甘い魔術師であったから——かつて人々が記録したところにしたがってはじめることを許されよ」という意味のことを述べているという。『イーゴリ軍記』の作者がしばしばボヤーンを引合いに出しているように、マナセスはホメーロスについて語ってもいる。さらにこの年代記の序文には、「傷ましき物語」にあたる言葉がみられるばかりでなく、「古き言葉」 *das ab-
zarozoyias* を用いて記述をすすめていくむねの記事があると

いわれる。このマナセスの年代記は、現在知られる限りでは、十四世紀の前半にブルガリアではじめてスラヴ語に訳されたことになっているが、マンソンの反対にもかかわらず(彼にとって当然これも偽作説の根拠になるのである)、『イーゴリ軍記』の作者が何らかの方法でこの年代記に通じていたという可能性はかなり大きいとみなければならぬ。彼がビザンツ文学の読者であったと考えられるさまざまな理由が存在するからである。

だがそれはそれとして、『イーゴリ軍記』の作者が機械的にマナセスの年代記の一部をとり出してきて、自分の作品の枕にすえたと考えることはできない。「古き言葉」という表現がたとえ *das abzarozoyias* (現存のスラヴ訳では *древнѣ словеса* となつてゐる) を下地にしていると仮定しても、十二世紀末のロシアにおけるその独自の内容を追求する意義と必要は依然として残るのである。

(1) Оприов, А. С. Слово о полку Игореве, 2-е Изд., Л., 1946, стр. 42 (Jakobson, op. cit., p. 238 ff.).

(2) Jakobson, R. op. cit., p. 238 その他。

五

比較的最近において『イーゴリ軍記』の冒頭を問題にしているのは、すでに上述したスモリーツキイである。スモリーツキイはボヤーンの詩の特質が奔放な想像力にあるとする従来の説を斥け、高揚した楽天性こそボヤーンの作品の特徴であると断

定して、『イーゴリ軍記』の作者の言わんとするところを次のように敷衍してみせる。作者はポヤーンに「古き言葉をもって」喜びにあふれる物語をはじめたことを望むのであるが、現実すなわち「今の世のまこと」がそれを許さないのである。ポヤーンは十一世紀の詩人で、諸公の「栄光」の歌い手であった。しかし『イーゴリ軍記』の作者はイーゴリの敗北を歌わなければならぬ。後者がたえず現在と過去を対比させるのは、このような明確な歴史的認識にもとづくものである、と。

この解釈の当否は別として、スモリツキイが前述のように「*прудныхъ повѣстй*」を「古き言葉」にかかる風格ととらえてゐること、そしてリハチョフ同様「古き言葉」を「ポヤーンの趣向」そのものとみなしていることは、ポヤーンの特徴を「高揚した楽天性」にみる理解とは明白に矛盾するよう思われる。しかし、スモリツキイの論究の出発点となっている次のような判断は正当なものであろう。『イーゴリ軍記』の導入部はそれ以後の叙述から切りはなされ孤立したものであるなく、作品の基本的思想と結びついた有機的な一部分をなしている。⁽²⁾「なみいる聴衆の前に立った詩人が、これからイーゴリ公の遠征の傷ましい物語をはじめようと述べ、ついでこの物語は「古き言葉をもって」はじめるのがふさわしくないだろうか」「兄弟」なる聴衆に問いかけている事実は、どれほど重くみても重すぎることはないのである。

『イーゴリ軍記』がたとえ「ポヤーンの趣向」にしたがっていないにしても、なおかつ「古き言葉をもって」書かれている

という解釈が可能であることはすでに述べた。反語法につづく *начи же...* の *же* を逆接続詞ととり、それが部分否定の役割を果していることは、文法的にも不合理ではない。

『イーゴリ軍記』と、それより半世紀ほどの作品である『ルーシの地の滅亡の物語』が「同一の詩的流派」the same poetic school につらなるという仮説を提出したのはシェネーヴのストラヴィスト、ソロヴィョフ A. V. Soloviev である。⁽³⁾ それよりさきオルロフは、キエフ時代の全期間を通じて年代記と対立する文学的伝統として親兵文学 *дружинная литература* の存在をみとめ、その代表的作品として『イーゴリ軍記』をあげている。⁽⁴⁾ 親兵は中世ロシアの戦士であり、ロシアの騎士である。オルロフの説は十九世紀末のバルソフの名著『親兵的キエフ・ルーシの芸術的記念碑としての『イーゴリ軍記』』*《Мою о помку Игореве》, как художественный памятник Киевской дружинной Руси* にみられる考え方を受けてついでとも⁽⁵⁾ と思われる。

もっぱら修道院の壁のなかで書きつがれる年代記や聖者伝が思想的にも修辭的にもビザンツ文学の絶対的影響下にあったことは当然であるが、これに対していわゆる親兵文学の担い手は諸公の従士たちであり、キリスト教との関係において比較的自由的な立場に立っていたにちがいない。もちろん親兵といえどもキリスト教やビザンツ文学と全く無縁であったわけではない。むしろ、『イーゴリ軍記』とマナセスの年代記との関係が例外ではないほどに、彼らのうちのある者はビザンツ文学に通暁し

ていたものと考えられる。しかもなお彼らは年代記や聖者伝の執筆者とは異なる世界観をもち、異なる文学的伝統をになつていたわけである。

その何よりの証左はイバーチイ写本のキーエフ年代記におけるイーゴリ公遠征の記録と『イーゴリ軍記』の相違である。両者の比較検討に今は深く立入る余裕はないが、要点を例挙すれば、前者においてイーゴリは「祈る公」、敬虔なるキリスト者としてあらわれるのに対し、後者では、公はキリストや教会について一度も思いをめぐらさぬ武人として描かれる。『イーゴリ軍記』の没宗教性はこの作品の際立った特徴をなしているのである。

『イーゴリ軍記』には年代記や聖者伝にふくまれるいわば教会的な合戦記とは異質の叙事詩的常套形式「loci communes」が数多くみられる。傷つきとらえられた夫をしのぶイーゴリの妻の哀歌も、同時代の聖者伝にしばしば採用されているものと異なり、明らかに民謡に近いひびきをもっている。かつてチホヌラーヴォフやポテブニヤが「古き言葉」の内容としてロシア古来の民謡のスタイルを理解しようとしたのは、鋭い洞察であったといわなければならない。

「古き言葉」に対立する概念は、当然「新しい言葉」である。『イーゴリ軍記』の作者は、キーエフ年代記あるいはスーズダリ年代記に収められたイーゴリ公の遠征の記録を知っていたかもしれない。読まなかったとしても、当時の政治的社会的諸關係にあれほど深い造詣を示しているのであるから、その記

述よりは推測できたにちがいない。しかし彼は自分なりに、イーゴリの遠征の顛末を物語ろうとする。ロシアの諸公にむかつて、「ルーシの地のため、イーゴリの傷にむくいるため……金のおぶみに足ふみ入れよ」と呼びかけるのを聞けば、作者の目的はもはやあらためて問うまでもない。目的がこれほど明確であるから、ボヤーンのこらした趣向をまねる必要はない。むしろ「今の世のまことのままに」語らねばならない。だがそれは、年代記風の客観化された抹香くさい記録——彼にとってこれが「新しい言葉」であったのではないか——とも異ならなければならぬ。(この点は別に論証を要するが、『イーゴリ軍記』の作者のようないわば在野の詩人にとって、文学上の最大のライヴァルは修道僧作家であつたと思われる。)かくして、古いロシアの伝統をふまえた文体が、この物語に最もふさわしいものとなるであらう。

『イーゴリ軍記』はその内的必然性のゆえに、「古き言葉をもつて」語られなければならない——これが筆者の到達した一応の結論であり、かつ当面の作業仮設である。

(1) Сноликкин, В. Г. *op. cit.*, стр. 5—19.

(2) *ibid.*, стр. 13.

(3) Soloviev, A. V. *New Traces of the Igor Tale in old Russian Literature, Harvard Slavic Studies*, vol. I, 1953, p. 78—79. ただしこれについてはソヴァエトの文学史家 Н. К. Гудзий との間で論争があつた。

(4) Орлов, А. С. *Героические темы древней русской*

Литературы. Обзор стиля «воинских» повестей XI-XII вв. *Известия АН СССР Отделение литературы и языка*, т. IV, 1945, стр. 75.

(9) Головенченко, Ф. М. *op. cit.*, стр. 210—216.

(6) この問題については拙稿「イイヨリ遠征物語」における人間像、『橋研究』第七号を参照された。
(一九六七・九・一五) (一橋大学講師・東京大学講師)